

「
イ
ッ
プ
ス
」

Parade556

【あらすじ】

プロ野球、横浜スタースの捕手、鬼塚圭亮（21）は、前シーズンでレギュラーになるも、クライマックスシリーズの暴投からイッパスになり、シーズン途中、横須賀にある3軍のリハビリ施設へ行くことを命じられる。

幼少期、両親がいなかった鬼塚は、長崎の佐世保で祖母の吉江に育てられた。吉江が利他的なポジションのキャッチャーが好きで、鬼塚は、吉江を喜ばしたい一心で、人一倍、キャッチャーに対しての思いを持っていた。

しかし周囲（代理人の果歩や一軍監督の新座など）は、鬼塚のホームランバッターとしての才能に期待し、ポジションを変更して打者に集中してほしいと望んでいる。それに対して鬼塚は頑として首を縦には振らなかった。

リハビリ施設で出会った三軍監督の安武壽成（69）とキャッチボールをするも、5mほど先にいる安武に、鬼塚はまともに投げることができない。二人のリハビリがはじまる。

そんな中、一軍は連敗。一軍監督の新座は、鬼塚を一軍に戻しスタメンで使うもイッブスが発動。鬼塚のミスでさらなる連敗を重ね、鬼塚は、失意のまま三軍に逆戻りする。

安武は、鬼塚を三軍施設のそばにある米軍基地に連れていき、子供たちに野球を教えることで気分転換させる。その帰り道、長崎の病院から電話があり、吉江が（鬼塚に黙って入院していた）が亡くなったと主治医の水田から告げられた鬼塚は、「自分のプレーで喜んでほしい人がいない」と、野球を辞める決意をする。ところが、鬼塚のファンである須田夫妻から、二人の息子の話を聞き、鬼塚は、自分のバッティングが多くの人に希望を与えていたことを知り、復帰を決意。

秋の二軍キャンプに捕手として参加。暴投を繰り返す中、力任せにバックスクリーンに投げたボールで外野手としての才能に気づき、自分で納得してポジション転向し、4年目のシーズンを外野手として一軍で迎える。

【人物関係表】

鬼塚圭亮（21）（11） プロ野球選手

横浜スターズの捕手。ドラフト一位で入団。

プロ3年目。2年目にレギュラーをとる。

性格は勝気。何よりも祖母の吉江を大事にしている。

鬼塚吉江（76）（66） 圭亮の祖母

幼少期に両親がいなくなった鬼塚を、一人で育てる。佐世保の米軍基地で調理師として働いていた（ドラマの時には引退）。

淡島果歩（35） 圭亮の代理人

弁護士。鬼塚にポジション転向をさせ、もっと打者として成績をあげさせ、将来のメジャー移籍をもくろんでいる。

新座徳栄（39） 一軍監督

鬼塚には、ホームランバッターとして天性の才能があると思い、期待している。しかしなかなか鬼塚が言うことを聞かない状態とチームの低迷に頭を悩ませている。

安武壽成（69） 三軍監督

唯一、鬼塚が捕手として再起したいという希望のために尽力する人物。ポジション転向は、本人が本当に望まないとできないと考えている。ドラマ後半で解雇される。

水田順平（61）

医師

長崎病院の医師。吉江とプロになる前、長崎に住んでいた頃の鬼塚の主治医。

須田元気（36）

鬼塚のファン

須田智花（36）

須田の妻

須田太陽（7）

須田の息子

太陽が鬼塚のファン。鬼塚のホームランが大好きだったが、小児がんで亡くなる。両親は、三軍に行った鬼塚を応援し続ける。

田牧健作（32）

三軍監督

解雇された安武の後任。二軍監督も兼務。

米軍基地の関係者・リトルリーグの子供たち

横浜スターズの球団スタッフ・ファンたち

横須賀病院の医師

横浜スターズの2軍選手たち

新座に取材するマスコミ

1 ○ 佐世保の米軍キャンプ・全景

米軍の艦船が港に停泊している。

人々の歓声。

2 ○ 同・野球場

米軍関係者（白人や黒人）の子供たちが試合をしている。その中に一人、日本人が混じっている。

鬼塚圭亮（11）、バッターボックスでバットを構える。

3 ○ 同・野球場の観覧席

米軍関係者に混じって、鬼塚吉江（66）が観ている。周囲の人達、圭亮を応援する。

関係者 A 「ケイ。GO。GO」

あちこちから、「ケイ」「ケイ」と圭亮への声援。

4 ○ 同・野球場

ピッチャーがボールを投げる。

鬼塚、バットを振りぬくと、ボールの

真芯に当たり、打球が高く舞い上がる。

鬼塚、ホームランを確信するように拳を突き上げる。

打球は、外野フェンスを越える。

ホームラン。

5 ○ 同・野球場の観覧席

吉江以外、大喜び。

鬼塚、グラウンドを一周しながら、

何度も吉江の方を向いてガッツポーズ。

吉江に喜ぶよう促す周囲の人達。

吉江、照れてうつむくばかり。

6 ○ 同・住宅街（夕方）

野球道具を持った鬼塚と吉江、並んで歩いている。

鬼塚「ばあちゃん。もっと喜ばんね」

吉江「喜んどるよ」

鬼塚「ホームラン打った時のことばい。でつかい当たりやったやろうが」

吉江「ホームランは、 안타がすごかだけた
い」

鬼塚「それがええんややないの。うれしくな
いとね？」

吉江「ばあちゃんは、最後が嬉しかったばい」

70 （回想）佐世保基地・野球グラウンド
最終回、2アウト満塁。

スコアボードは、2ボール0ストライ
ク。鬼塚のチームが1点差で勝ってい
る。

マウンドにいるピッチャー、今にも泣
き出しそう。

捕手の鬼塚、マウンドまで行き、なだ
める。

スタンドの父兄からも応援する声。
球審がマウンドに近づいてくる。

鬼塚と球審、キャッチャーズボックス

に戻る。

× × ×

試合再開。

ピッチャー、セットポジションになる。

バッター構える。

鬼塚「ジェフ。カモン、カモン」

ピッチャーが投げたボールはワンバウンド。
ンド。

鬼塚、ミットで受け止めると一塁に送球。小学生とは思えない速いボール。
一塁手が飛び出していたランナーにタッチしアウト。

試合終了。

8
○ 元の通り

鬼塚と吉江、並んで歩いている。

吉江「ええプレーやったばい」

吉江、鬼塚の頭をなでる。

鬼塚、恥ずかしそうにしながら、

鬼塚「博打やったけどね」

吉江「ばあちゃん。キャッチャーが好きや。

人様のため、チームのために働ける人やない
いと務まらん仕事やけん」

鬼塚「ばあちゃんの仕事と一緒にやね」

通りの向こうに、食堂が見える。

吉江「兵隊さんは、大統領から命令ば受けたら、戦地に行かないかん。いつ、死んでしまいかからんお仕事やけん。ばあちゃん、コレが最後の食事になるかもしれん思うて、毎日、心こめてご飯ば作るとよ」

鬼塚、夕焼けの眩しさに目を細めるようにして吉江を見る。

通りの向こうから、米軍関係者の親子連れが歩いてくる。

父親と母親と息子。普通の家族。当たり前の家族。しかし鬼塚は、祖母と二人で歩いている。

鬼塚と吉江、立ち止まる。

吉江、鬼塚の横顔を見る。

吉江「圭亮。ばあちゃん……」

鬼塚、笑顔で吉江の方を向き、

鬼塚「俺、ドラフト一位でプロ野球選手になる」

吉江「：そうね」

鬼塚「ばあちゃんの好きなキャッチャーでプロになるけん」

吉江「ありがとう」

鬼塚「俺は天才やから」

鬼塚、歩き出す。吉江もついていく。

吉江「さ、帰らんと。暗くならんうち」

吉江、鬼塚に手を差し出す。

鬼塚「うん」

鬼塚、吉江の手を握り返し歩き出す。

吉江「アンタ、手、ごつごつしよるね」

鬼塚「毎日、1000本、素振りしちよるけんね」

吉江「将来のドラフト1位の手じゃ」

鬼塚「そうや（吉江とつないだ手を力強く振る）」

吉江「そがん振ったら、ばあちゃんの腕がも

げるやないの」

二人、笑いながら歩いていく。

9
○ 吉江と鬼塚の自宅・居間（→10年後）

※現在までの時間経過を、サイドテーブルに、鬼塚が野球で活躍した時の写真やトロフィーなどが増えていくことで表現。

リトルリーグの写真やトロフィー。

中学、高校野球の写真やトロフィーに加えて新聞記事の切り抜きが増えていく。豪快なホームランを打つ写真。捕手としてプレーしている姿など。

そして、ドラフト1位で横浜スターズに入団。「背番号2」のユニフォームを着た写真や新聞記事。見出し【強肩強打の高校生】今年のナンバーワン選手】など、鬼塚への期待に溢れた記事ばかり。

プロ1年目、一軍初出場、初打席初球

ホームランの記事や記念ボール。

プロ2年目、15本のホームランを打つ。

しかし以降、3年目（現在）は何も置かれていない。

100 同・仏間（夕方）

鬼塚吉江（76）、仏壇の前で正座し、おがんでいる。

仏壇の上に、スポーツ新聞の切り抜きが重ねられている。

一番目立つところに、昨シーズン（2年目）クライマックスシリーズ最終戦。

冒頭のリトルリーグの試合同様、鬼塚は一塁へ送球し飛び出したランナーをアウトにしようとするも、暴投となり敵チームのランナーが生還。試合に負けたという記事。

今シーズンの記事。鬼塚のエラー。最近の日付の記事には、捕球後、ピッチ

ヤーへの返球で暴投。

重ねられた新聞記事のほとんどに、【イ
ップス】の文字が書かれている。

鬼塚（声）「なんで、俺がリハビリ組なんです
か」

1 1 〇 横浜球場・全景（夕方）

一軍の球場。

試合が終わり、ファン達が帰っていく。

壁面に飾られた有名選手の横断幕。

中心に飾られているのは他の選手だが、

鬼塚の横断幕も端の方に飾られている。

1 2 〇 同・監督室（夕方）

背番号 8 9 のユニフォームを着た新座

徳栄（39）、監督席の椅子に座っている。

その前に、背番号 2 のユニフォームを

着た鬼塚圭亮（21）が立っている。

新座「圭亮、ちよつと落ち着け」

鬼塚「俺はイップスじゃないっすよ」

新座「じゃあ、今日の暴投はどう説明するんだ」

鬼塚「たまたまでしょう」

新座「なあ圭亮。ポジション代えろ。得意のバッティングをだな」

鬼塚「キャッチャーができないなら引退します」

新座「わかった。なら代打でもいいから上に残らんか？」

鬼塚「スタメンではダメってことですか？」

新座「またいつ暴投するかわからんだろ」

鬼塚「代理人、呼びます」

新座「またかよ」

130 同・監督室（夜）

スーツ姿、眼鏡をかけた気難しそうな顔の淡島果歩（35）、新座を睨みつけている。

鬼塚、果歩の隣に立っている。

果歩「圭亮くんは、イッブスではありません」

新座「何を根拠に」

果歩「そちらこそ何を根拠に。まさか、マスコミの記事ってわけじゃありませんよね」

新座「俺は、圭亮に上に残ってほしいと思っています。バッティング、こと長打力に関してはチームでもナンバーワンです」

果歩「それについては私も同意見です」

新座「といって、代打は本人も嫌がっている」

果歩「打席数が少なくなるのでは意味がありません」

新座「だから、ポジション転向を打診しました」

果歩「…」

新座「もっとバッティングが活かせるように、外野やファーストに行けば、足腰の負担も減る。そもそも、キャッチャーほど試合の準備、反省に時間を使うポジションはない。つまり、肉体的なトレーニングをする時間が減ってしまう」

果歩「…」

新座「俺はもつと…」

果歩「(遮って) 監督」

新座「はい。どうぞ」

果歩「私も同じことを圭亮くんと言ってるんです。なのに言うこと聞かなくて」

鬼塚「いやいや淡島さん」

果歩「この子の才能があれば、ホームラン王も夢ではないです」

新座「俺もそう思いますよ」

1 4 ○ 同・全景(夜)

壁面に飾られた横断幕。

新座(声)「今、球団は、新しいスターをほしがってる」

1 5 ○ 同・監督室(夜)

果歩と新座、意気投合する。

果歩「そうなんです。そう。この子にはその才能がある」

新座「圭亮は、天性のホームランバッターで

すよ」

果歩「将来、メジャーも夢じゃないと思って
ます」

新座「今すぐにでも打者に集中できるポジシ
ョンに代えたい」

果歩「でも、何故かキャッチャーにこだわっ
てる」

新座「なんでなんだよ圭亮」

果歩「圭亮くん。なんでなの？」

鬼塚「キャッチャーが好きなんですよ」

新座「ポジション転向しろ」

果歩「もつとバッティングを活かして」

鬼塚「あーもう、リハビリ組でもなんでも行
くよ」

新座と果歩にガミガミ言われ、めんど
くさそうにそっぽを向く鬼塚。

160 果歩の運転する車・車内（夜）

運転席に果歩。助手席に鬼塚。

果歩「ほんとに良いの？それで」

鬼塚「いいよ」

果歩「プロとしての時間を無駄にするのよ」

鬼塚「俺はキャッチャーなの」

果歩「もっと自分のセールスポイントを活かして」

鬼塚「セカンドまでの送球は、球界でもナンバーワンだよ。メジャーでも」

果歩「そんなの、あなたのパワーのせいだよ？」

鬼塚「なんでそんな下げる言い方すんだよ」

果歩「バッティングなの。あなたの最大の魅力は」

鬼塚「キャッチャーができないなら意味ない」

果歩「なんで、そこまで強情なの。わかってるでしょ。引退後のキャリアも、選手時代の成績で決まるのよ。キャッチャーで何試合出たかより、通算ホームランを何本打ったかの方が価値がある」

鬼塚「俺は、それを両立できる」

果歩「無理。どちらかよ」

鬼塚「ならキャッチャー」

果歩、盛大なため息をつく。

果歩「良い？よく聞いて。リハビリ組なんて行ったら、その間、試合に出れないのよ」

鬼塚「キャッチャーとして出れないなら、意味ない」

果歩「ほんと意味わかんない」

鬼塚「降ろしてくれ」

果歩「なんで」

鬼塚「歩いて帰りたい」

果歩「家まで1時間も歩くの？怪我したらどうするの」

鬼塚「怪我なんかするか」

果歩「依頼人を守るのが代理人の仕事なの」

鬼塚「依頼人の気持ちを大事にするのも代理人の仕事なんじゃないの」

果歩、急ブレーキで車を停める。

170 横浜駅近くの通り（夜）

果歩の車から降りてくる鬼塚。

果歩の車、すぐに走り去っていく。

鬼塚、一人歩いている。

鬼塚、スマホで電話する。

鬼塚「ばあちゃん。ごめん。まだ起きとった？」

18〇 吉江の自宅・仏間（夜）

吉江、寝巻姿で仏壇に手を合わせている。

スマホはスピーカーモード。

吉江「今、アンタのこと、ご先祖様にお祈りしちよるんよ」

鬼塚（声）「俺は大丈夫じゃ。全然、どこも怪我しとらんし」

吉江「悪い気が、あんたについとるんかもしれんけん」

鬼塚（声）「なんも。俺は負けんよ。そんなもん」

19〇 横浜駅近くの通り（夜）

鬼塚、電話しながら歩いている。

吉江（声）「無理せんでね」

鬼塚「…なーんも。余裕じゃ」

吉江（声）「無理ばしたらいかん」

鬼塚「無理なんかしとらんよ」

吉江（声）「そうね」

鬼塚「俺、明日から三軍や」

吉江（声）「え…イップスのせいね？」

鬼塚「イップスやないっちゃけどね」

吉江（声）「大丈夫と？」

鬼塚「余裕よ。すぐ一軍に戻るけん」

吉江（声）「うん」

鬼塚「じゃあ、もう切るばい」

吉江（声）「アンタ…キャッチャーのせいで苦しんどるんじやなかね？」

鬼塚「…」

吉江（声）「ばあちゃんが好きやって言っただけや。アンタに…」

鬼塚「ばあちゃん。俺、キャッチャーが好きや」

吉江（声）「…」

鬼塚「キャッチャーやないと、野球やってる感じがしないんよ」

吉江（声）「ぼってん、ばあちゃんが…」

鬼塚「ばあちゃんのせいじゃなか。俺が、俺自身が選んだんじゃ」

吉江（声）「…」

鬼塚「俺が、心の底からキャッチャーをやりたいて思うちよるんや」

吉江（声）「…」

鬼塚「俺、もつとばあちゃんが喜んでくれるようなプレーがしたか。期待しとってや」

吉江（声）「ありがとう」

鬼塚「おお」

吉江（声）「…アンタ、今、外におるんやろ。寒くなってきたけん。あったかくして眠りんしゃい」

鬼塚「ありがと。ばあちゃんもね」

吉江（声）「ばあちゃんは元気だけが取り柄やけん。大丈夫」

鬼塚「うん。おやすみ」

吉江（声）「おやすみ」

鬼塚、電話を切る。

通りの反対側にファミレスが見える。

窓際の席で、楽しそうに食事をする親子連れが見える。

鬼塚、気付くと拳を強く握っている。

自分がそんなことをしていることに気づき、苦笑して歩き出す。

200 吉江の自宅・仏間（夜）

吉江、腰の痛みを感じ、腰をおさえて苦悶の表情でうずくまる。

吉江、鬼塚に電話しようとするも、止める。

だんだん痛みが治まってきて、表情をゆるめる吉江。

210 横須賀の街・全景（朝）

軍港には、米軍の艦船が並んでいる。

国道を走る果歩の車。

2 2 ○ 果歩の運転する車・車内（朝）

果歩が、イライラしながら運転している。

助手席に鬼塚。

鬼塚、窓の外の米軍基地を見ている。

果歩「ちよつと、聞いている？」

鬼塚「ああ」

果歩「10日で一軍に戻って」

鬼塚「：わかってるよ」

果歩「なんにもわかってない。あなたは」

鬼塚「うるせえなあ」

果歩「何、その言い方。ほんとムカつく」

車列に割り込んでくる車。

果歩、クラクションを鳴らし、

果歩「ああ。もう、邪魔なんだよッ」

2 3 ○ 横須賀球場・全景（朝）

球場と室内練習場（ブルペンやトレーディングルームも有）。それからプレハブ小屋のような小さな事務所がある。

240 同・グラウンド・一塁側ベンチ（朝）

鬼塚、果歩の前にスターズのジャージを着た安武壽成（69）。

果歩、安武に名刺を渡している。

果歩「鬼塚選手の代理人をしております淡島です」

安武「三軍監督の安武です」

安武、果歩の名刺を見て、

安武「弁護士…ですか」

果歩「率直にお伝えします。10日後に、この子を一軍に戻してください」

安武「それではこちらも率直にお答えします。

代打、またはポジション転向を前提した話であれば、お約束します」

果歩「…」

安武「（鬼塚の方を見て）どうだ？」

鬼塚「俺は、キャッチャーです」

果歩「ああ…バカ」

安武「じゃあ、スローイングの克服だ」

鬼塚「俺は、イップスじゃありません」

安武「まずはユニフォームに着替えろ。そこからだ」

鬼塚「はい」

鬼塚、ベンチ裏に入っていく。

果歩、溜息をつく。

安武「イッスを治すのは大変です」

果歩「ええ。完全に治ることはない」

安武「アレは、技術、心理、両方の面からアプローチしないといけない」

果歩「その通りです」

安武「鬼塚は、地肩が強い。指導者も、速いボールが放れる選手には特段、指導はしません」

果歩「だから、つまずいた時に……」

安武「これまで放り方を意識したことがないんだから、仕方ないでしょう」

果歩「あの子、驚くほど、何も考えないで生きてます」

安武「だから、観客を魅了するんです。アイツは天才だ……そういうタイプは治りにくい」

果歩「私は代理人です。つまり、彼からお金をもらっている。でも、それだけのために主張しているわけではありません。彼の才能を、このまま失ってしまうのがもったいない」

安武「同感です」

果歩「それでは、私はこれで。あとはプロにお任せします」

安武「お任せください」

果歩「できれば、キャッチャーは諦めさせてい

安武「立場上：はいとは言えません」

果歩「失言でした。それでは、失礼します」

果歩、頭を下げるとベンチ裏へ入っていく。

250 同・グラウンド・バックネット裏

トスバッティングをしている鬼塚と安武。

打っているのは安武。トスを上げるの

が鬼塚。

以下、トスバッティングしながら。

鬼塚「いつまで、こんなことしてるんですか」

安武「つきあえよ。爺さんにさ」

鬼塚「俺は、1日も早く一軍に戻りたいんです」

スタンドは解放されており、ファンが観ている。その中に、鬼塚のユニフォームを着た須田元気(36)と須田智花(36)がいる。二人は、心配そうな顔で鬼塚のことを見ている。二人以外のほとんどが物見雄山な野次馬たち。カメラを向けて鬼塚を撮影している。

鬼塚、観客たちのカメラを気にする。

安武「まあ、そう慌てるな」

鬼塚「どこも怪我してないんです。俺は」

安武「それはいいことだ」

鬼塚「俺は、こんなトコで遊んでるわけには
いかないんです」

安武「今年は、何試合出た？」

鬼塚「5月までは全試合です」

安武「そうか。開幕からずっと4番キャッチャーだったもんなあ」

鬼塚、籠からボールをつかむも投げるのを止め、

鬼塚「監督」

安武「ヤスさんで良い。みんなそう呼んでる」

鬼塚「監督。マスコミの報道に惑わされないでください」

安武「…」

鬼塚「俺は、すぐに一軍でやれる」

安武「5月に3回、6月に2回」

鬼塚「…」

安武「スローイングのミスだ。リーグで一番多い」

鬼塚「だからってイッブス…」

安武「スローイング」

鬼塚「イッブスでしょ」

安武「イッブスなんて言葉は使うな」

鬼塚「言葉ごときに、俺は負けませんよ」

安武「オマエは強いな。だから2年目でレギュラーになれた」

鬼塚「監督」

安武「基本練習からだ」

鬼塚「そうじゃなくて」

安武「それがクリアできなきゃ、俺は上に推薦しない。キャッチャーのミスは、取り返しがつかない。だろ？」

260 （回想）吉江の自宅・仏間

クライマックスシリーズの記事。

鬼塚（声）「俺はイッブスじゃない」

270 元のグラウンド

安武、バットを地面に置くと、

安武「わかった。じゃあ現状を把握しとこう。

室内行くか」

鬼塚「室内？なんですか？」

安武、スタンドのファンを見て、

安武「キャッチボールやるから」

鬼塚「なら、ココでいいでしょう」

安武「いいのか？」

鬼塚「もちろん」

× × ×

鬼塚と安武、キャッチボールをはじめ
る。

5 mほどの距離を開ける二人。

安武、鬼塚に山なりのボールを投げる。

鬼塚、キャッチャーミットで捕球。ボ
ールを見つめる。

安武「…」

鬼塚、ボールを見つめる。

観客たち、カメラを向ける。須田と智
花だけが心配そうに見ている。

観客 A「早く投げろお」

鬼塚、左腕も下半身も全く使えていな
い手投げのような感じで投げる。

ボールが引っかけかり、安武の右足の前
あたりでワンバウンドする。

色めき立つ観客たち。

鬼塚「あ」

安武、ボールを拾う。

安武「鬼塚」

鬼塚「たまたまですよ。たまたま」

安武、鬼塚にボールを投げる。

鬼塚、ボールをキャッチする。すぐに投げる。

今度は、ボールが抜けてしまい、安武のはるか頭上を越えていく。

ざわざわする観客たち。

鬼塚「あれ？おかしいな」

鬼塚、バックネット裏（トスバッテリーで使用していた）に置いてある籠からボールを拾う。

安武「やめよう」

鬼塚「なんです」

安武、観客のカメラを気にする。

鬼塚「俺はやれますよ。全然」

安武「鬼塚」

鬼塚「やれるよ」

安武「落ち着け」

鬼塚「俺は、こんなとこにいられないんだ」

安武「じゃあ、投げられるのか？」

鬼塚、ミットに入ったボールを見る。

ボールを掴もうとする右手が震えていることに気が付く。

鬼塚「クソっ。ふざけんな。ふざけんなよ」

鬼塚、自分の右手をフェンスで殴りつける。

安武「おい。何やってんだ。やめろ、やめろ」

安武や球団スタッフが止めに入る。

スタンドで見守る須藤と智花が心配そうに見ている。他の観客たちは、面白いものが撮れるとばかりにカメラを向ける。

280 同・ロッカー室（夕方）

鬼塚、ユニフォーム姿のまま、果歩に

電話している。

果歩（声）「で、怪我はないのね」

鬼塚「ねーよ。何度も言わすな」

果歩（声）「右手、ほんとに大丈夫なのね？」

鬼塚「大丈夫だよ」

果歩（声）「ほんとバカ」

鬼塚「うるせえな」

果歩（声）「あのね、君の生殺与奪の権利は、

安武監督にあるのよ」

鬼塚「いちいち難しい言葉使うなよ」

果歩（声）「とにかく、監督の言うこと聞いて」

鬼塚「俺はイッブスなんかじゃない」

果歩（声）「その場にいなかったから、正確な

ことはわからないけど」

鬼塚「俺は、リーグで一番打つし、肩だって

ナンバーワンだ。俺以上のキャッチャーな

んていないんだよ」

果歩（声）「いったん落ち着こう。まず、タス

クをはっきりさせよ」

鬼塚「何がタスクだよ」

果歩（声）「イッブスを認める、認めない問題は置いておいて、スローイングが改善され

ない限り、あなたは一軍には上がれない」

鬼塚「…」

果歩（声）「何故なら、あなたは横浜スターズという球団に所属していて、使うか使わないかは監督が決めるから」

29〇 同・入口（夕方）

閉門。

観客たち、帰っていく。その中に須藤と智花もいる。名残惜しそうにグラウンドを見る二人。

30〇 同・グラウンド（夕方）

安武、一人で片付けている。

31〇 同・ロッカールーム（夕方）

鬼塚、電話片手にうつむいている。

果歩（声）「そうでしょ？」

鬼塚「…」

果歩（声）「圭亮くん」

鬼塚「そうだよッ」

果歩（声）「とにかく監督の言うこと聞いて」

鬼塚「（苦虫を噛み潰したような顔）」

果歩（声）「信じてるから。あなたのこと」

鬼塚「…クソっ」

果歩（声）「見返してやろうよ。悪く言った奴ら、全員」

鬼塚「…」

果歩（声）「寒くなるから、早く帰ってよ。ねえ、聞いているの？」

鬼塚、電話を切る。

3 2 〇 同・グラウンド（夜）

安武、一人で片付けている。

鬼塚、現れる。

鬼塚「監督」

安武「おお。オニ」

鬼塚「すいませんでした」

安武「若いっていいなあ」

鬼塚「自分が恥ずかしいです」

安武「なーんも。気にするな」

鬼塚「一人で片付けてたんですか？」

安武「ああ。金がないんだよりハビリ組は」

鬼塚「すいませんでした。俺、知らなくて」

鬼塚も片付けをはじめる。

安武「なあ、オニ」

鬼塚「はい」

安武「すまなかった。強引にやりすぎた」

鬼塚「監督」

安武「お前の言う通りだ。ココは、オニのいるところじゃない。だから俺も焦ってた」

鬼塚「…みんなが、俺にポジションを代えろ

と言う」

安武「そうか」

鬼塚「でも俺は、キャッチャーを続けたい」

安武「なら、何を迷うことがあるんだ」

鬼塚「え…」

安武「キャッチャーやれよ」

鬼塚「…いいんですか？」

安武「やりたいんだろ？」

鬼塚「…」

安武「オマエ自身が」

鬼塚「…」

安武「違うのか？」

鬼塚「やりたいです。やりたい」

安武「ならやろうぜ」

鬼塚「はい。はい」

安武「俺は、オマエの強みをどんどん伸ばしてやりたい」

鬼塚「ありがとうございます」

安武「感謝する必要はないよ。それが俺の仕事だ」

鬼塚「ありがとうございます。ヤスさん」

鬼塚、片付けを手伝いはじめる。

安武、子どものように喜ぶ鬼塚を好々

爺のように見ている。

330 同（夜）

バックネット裏の時計は、夜中の2時。

トスバッティングのマシンからボール

が飛び出てくる。

鬼塚、ワンバウンドで掴むと、セカンドにスロー。

ボールは大きくネットをそれる。

ネットの中、一つもボールは入っていない。グラウンドのあちこちにボールが転がっている。

3 4 ○ 同（明方）

鬼塚、ボールを投げている。

3 5 ○ 横須賀の病院・全景

3 6 ○ 同・診察室

医師の前に、鬼塚、果歩、安武。

3 7 ○ 果歩の運転する車内

果歩が運転席。

後部座席に鬼塚と安武。

果歩「ほんと、バカ。投げすぎて肩の炎症と

か」

鬼塚「…」

安武「いや、ほんと申し訳ない」

果歩「昭和の根性野球じゃないのよ」

安武「俺も止めなかったんで」

果歩「ほんとにそうですよ」

安武「すいません」

果歩「ノースローが一週間。その間、左手と

両足、体幹は鍛えておいてくださいよ」

安武「はい」

380 横須賀球場・駐車場

曇天。今にも雨が降りそう。

走り去っていく果歩の車。

鬼塚と安武、見送る。

安武「こええな。オマエの代理人さん」

鬼塚「すいません」

安武「オニは間違っていないよ。俺も現役なら、

オニと同じことをした」

鬼塚「…」

安武「心と体ってさ、つながってるように見えるけど、案外、バラバラなんだよ。心に身体が引っ張られることもあるし、逆もある」

鬼塚「：すいません」

安武「とりあえず、一週間は放れないんだ。

逆に良い気分転換になったと思えよ」

鬼塚「はい」

390 同・室内練習場・トレーニングル

ム

鬼塚、いかにも重そうなダンベルで左腕を鍛えている。

× × ×

鬼塚、アブダクションマシンを使い、両足でバーベルを上げている。

その光景を見ている安武。

400 同・球場のスタンド

雨が降りはじめ。

ほとんどのファンが帰って行く中、須田と智花は傘を差して見ている。

安武、二人に近づいて話しかける。

4 1 〇 同・トレーニングルーム

練習を終えた鬼塚。

安武、入室。

安武「オニ。ちよつといいか」

鬼塚「はい」

安武「オマエのファンがさ、待ってる」

鬼塚「ああ」

鬼塚、あからさまに嫌な顔。

安武「オニ」

鬼塚「いや、俺、こんなだし」

安武「ファンには関係ないだろ。な」

鬼塚「…いや、今じゃないでしょ」

安武「オニ」

4 2 〇 同・球場の入口

鬼塚を待つ須田と智花。須田の手には、

鬼塚のユニフォームを着た須田太陽

(一)の写真が握られている。

安武(声)「須田さんっていつてご夫婦なんだけどな。太陽くんって息子さんがいてさ」

4 3 〇 同・トレーニングルーム

鬼塚と話す安武。

鬼塚「今の俺なんとか話しても、何の価値もないですよ」

鬼塚、立ちあがると部屋を出ていく。

安武「おい。オニ」

安武、言葉を失う。

4 4 〇 同・球場の入口

安武、須田と智花に頭を下げている。

恐縮する須田と智花。

4 5 〇 横浜球場・ライトスタンド(夜)

試合後、横断幕をかかげるファン達。

【今すぐ辞めろ 新座】

【点をとらなきゃ野球は勝てない】

【鬼塚を4番に戻せ】

ファンが鬼塚コールをはじめる。

4
6
○ 同・監督室（夜）

新座、入室するとドアを後ろ手で閉める。そして大きな溜息をつく。

壁掛けのホワイトボードには、今月の試合スケジュール。

日付ごとに相手チームの名前と球場、それから勝敗が○と×で書かれている。

新座、ホワイトボードに近づいていくとホワイトボードマーカーを手にとり、

今日の試合、×と書く。

今月は、ほとんどが×。

試合ごとに得点も書かれており、ほとんどの試合で3点以上とれていない。

新座、デスクの固定電話をとる。

4
7
○ 横須賀球場・事務所（夜）

安武、電話に出る。

安武「そろそろ、あるかなって思ってたよ」

新座（声）「どうですか？圭亮」

安武「どうもこうもないよ」

48〇 同・室内練習場（夜）

鬼塚、内野グラウンドで、キャッチャーボックスからセカンドスローの練習をしている。

セカンドベースの真裏にネット。

キャッチャーボックスの脇にボールの籠を置き、そこからボールを掴み、投げている。

安武（声）「まったく良くなってない」

鬼塚、地面にボールを叩きつけてしま
う。

49〇 同・事務所（夜）

安武、新座と電話で話している。

新座（声）「圭亮を、一軍に戻します」

安武「代打でか？」

新座（声）「スタメンで」

安武「無理だ」

新座（声）「それしか方法がない」

安武「聞け。無理だ。キャッチャーは」

新座（声）「ヤスさん。これは、一軍監督としての命令です」

安武「承知：しました」

5 0 〇 同・駐車場

果歩の車が出ていく。

安武、心配そうに見送っている。

5 1 〇 果歩の運転する車・車内

横須賀周辺の市街地を走っている。

運転席に果歩。助手席に鬼塚。

鬼塚「もっと喜べよ」

果歩「…」

鬼塚「嬉しいだろ。一軍だぞ」

果歩「治ってないでしょ。全然」

鬼塚「余裕だよ。一軍の、ひりひりする感じでやれば」

果歩「ほんとに？」

鬼塚「代理人なら、依頼人の気持ちに寄り添えよ」

果歩「代理人は、依頼人の価値を落としちゃダメなの」

鬼塚「俺はやれる。見返してやるよ。全員な。」

（果歩を指差して）アンタのことだ」

果歩「…」

鬼塚の電話が鳴る。液晶画面に【長崎

病院・水田先生】。

鬼塚、電話に出る。

鬼塚「もしもし」

5 2 〇 横浜球場・全景

開門前。

ファンたちが球場の周りに集まっている。

鬼塚のユニフォームを着たファンが多

くいる。

鬼塚（声）「ばあちゃん。ほんとに大丈夫とね？」

530 同・駐車場

果歩の車が停まっている。

車の外で、鬼塚、吉江と電話している。

鬼塚の隣に果歩が立っている。

吉江（声）「先生が大げさに電話しただけたい」

鬼塚「ほんとにただの眩暈ね？」

吉江（声）「ばあちゃんも年やけんね」

鬼塚「ほんとに眩暈やね？」

吉江（声）「心配せんで大丈夫」

鬼塚「ばあちゃん。俺、今日から一軍や」

吉江（声）「そうね」

鬼塚「俺、またキャッチャーで4番や」

吉江（声）「そうね」

鬼塚「みとつて。またばあちゃんのために

打っけん。あ、キャッチャーもやるけんね」

吉江（声）「うん。がんばらんば」

鬼塚「ばあちゃん。無理せんでね」

吉江（声）「わかつちよるよ。練習やろ」

鬼塚「おお。じゃあ、電話切るばい」

吉江（声）「はいはい」

鬼塚、電話を切る。安堵して笑う。

果歩には見せない砕けた笑顔。

鬼塚「よし。行ってくる」

鬼塚、気合を入れなおし球場に入っていく。

その背中を心配そうに見守る果歩。

5 4 ○ 横須賀球場・事務所

安武、スマホニュースを見ている。

鬼塚、2本のホームランを打って勝利。

しかし暴投もある。

5 5 ○ 同

別日。ネットニュース。

鬼塚の暴投で失点。

バッテリーも二三振。

試合にも負ける。

5
6
○ 同

また別日。ネットニュース。

イップスの記事。

ピッチャーの返球で暴投。

バッティングも4三振。

試合も敗退。

5
7
○ 同（夜）

安武、電話をしている。

安武「そうか。わかった」

安武、電話を切る。そして力いっぱい、
テーブルをたたくと、

安武「オニをつぶす気か。コノヤロー」

5
8
○ 同・駐車場

果歩の車が入ってくる。

5
9
○ 同・事務所

安武、果歩と話している。

果歩「すいません。よろしく願いします」

安武「私が、ちゃんと反対していれば」

果歩「あの子も、これで分かったと思います。」

もうキャッチャーとしては……」

安武「待つてください」

果歩「キャリアが終わってしまいます」

安武「アイツ自身が決めないとダメだ。周りが

どんなに言っても」

果歩「もし、キャッチャーをやると言ったら？」

安武「それを助けるのが私の仕事です」

果歩「でも」

安武「ポジションを代えてでも試合に出たい

と言えそうです」

果歩「上からはなんと」

安武「何も。ただ、落とすと」

果歩「無責任な」

安武「すいません。ほんとうに」

果歩「監督のせいじゃありません」

安武「私も、球団の人間ですから」

果歩「あの子、傷ついています」

6 0 〇 同・室内練習場

鬼塚、誰もいない内野グラウンドを茫然と見つめている。

6 1 〇 同・事務所

安武、果歩と話している。

安武「判断を間違えました」

果歩「今は、かける言葉がなくて：すいません。代理人失格です」

安武「お任せください。立ち止まってる時間はない。アイツがキャッチャーとしてやりたいのなら、傷ついていても、立ちあがり、前を向くしかない」

果歩「監督」

安武「ちよつと、行ってきました」

6 2 〇 同・室内練習場

鬼塚に声をかける安武。

それを遠くから見つめる果歩。

630 長崎の病院・診察室

吉江、白衣を着た水田順平（61）の前に座っている。

水田のデスク周りの壁やサイドテーブルには、鬼塚の高校時代やプロのプレーしている写真、サインボールなどが飾られている。

テーブルの上には、吉江の診断書とCT画像。

水田「ほんとうに、圭亮くんに言わなくていいんですか？」

吉江「あの子に迷惑かけとうなかです」

水田「迷惑だなんてそんな：吉江さんの命にかかわることじゃないですか」

診断書には、すい臓がん。ステージ4の文字。

吉江「ええんです。ほんなこて」

水田「圭亮くんには伝えないと。家族なんだから」

吉江「私から言いますけん」

水田「必ず、伝えてくださいよ」

吉江「ええ」

水田「それでは明日から、緩和ケア病棟に入院していただきます」

吉江「ご迷惑ば、おかけします」

水田「迷惑だなんてそんな：定期診断で見つけらなくて、ほんとうに申し訳ない。ほんとうに：」

水田、目に涙をためている。

吉江「すい臓のガンは、見つかりづらいけん」

吉江、水田を見て笑う。

水田「吉江さん」

吉江「あの子にだけは迷惑かけたくなか。負担にもなりたくなか。それだけたい」

水田「：」

6 4 ○ 横須賀球場・室内練習場

鬼塚と安武、ベンチに座り話している。

安武「そうか。そんなことが：」

鬼塚「物心ついた時、親がいなくて、ばあち

やんが俺を育ててくれたんです。だから、
ばあちゃんの喜ぶ顔だけが見たくて。それ
があったから俺、ここまで野球をやっ
てこれたんです」

安武「その話、淡島さんは知ってるのか？お
ばあちゃんのために野球をやってきたこと」

鬼塚、首を横に振る。

安武「そうか。わかった。オニ、もう一度、
キャッチャーとしてやり直そう」

鬼塚「ヤスさん。俺：右手の上腕の感覚がほ
とんどないです。ボールを持った時」

安武「そうか」

鬼塚「俺、イップスですね。完全に」

安武「よし。室内行くぞオニ」

6 5 ○ 同・室内練習場・内野グラウンド

鬼塚、壁に向かってボールを投げてい
る。壁まで3 mほどの距離。

鬼塚、ボールを地面にたたきつけてし
まう。

安武「ひばりでも、もぐらでも、どっちでも

いい。どんどん殺せ」

鬼塚「はい」

安武「指先の感覚だけ意識しろ」

鬼塚「はい」

鬼塚、距離を広げようとする。

安武「慌てるな。まず、この距離から放れ」

鬼塚「わかりました」

鬼塚、ボールが抜けて真上に行く。

6 6 〇 同

鬼塚、バッティング練習。

安武がボールを投げる。

鋭い打球が飛ぶ。

安武「いやあ、良いね」

6 7 〇 同・トレーニングルーム

鬼塚、筋力トレーニングをしている。

6 8 〇 同・室内練習場

別日。

鬼塚、また壁当てをしている。
相変わらず上手くない。

6
9
〇 同・全景

T・「3ヵ月後」

季節は、秋の色に染まりはじめている。

7
0
〇 横須賀の米軍基地・全景

フェスティバルの日。

鬼塚と安武、入っていく。

7
1
〇 同・目抜き通り

出店などあり、賑わっている。

7
2
〇 (回想) 佐世保の米軍基地・目抜き

通り

T・「10年前」

同じようなフェスティバル。

鬼塚と吉江、歩いている。

鬼塚（声）「佐世保でもありましたよ」

7 3 〇 元の通り

鬼塚と安武、歩いている。

安武「おばあちゃんに行ったのか？」

鬼塚「ええ。ばあちゃんと」

安武「オニと行きたいところがあるんだ」

鬼塚「え？」

7 4 〇 同・野球場

子供たちが、野球の練習をしている。

鬼塚と安武、入っていく。

米軍関係者「ヤス」

安武「ヘロー。テリーさん」

安武と軍人、ハイタッチする。

7 5 〇 同

鬼塚と安武、子供たちに野球を教えている。

キャッチボールをする子供たち。

まともに投げられる子の方が少なく、
ボールがあちこちに飛んでいく。

保護者や関係者が、楽しそうにその光
景を見ている。

子供たちも楽しそうに野球をしている。

鬼塚の顔にも、自然と笑顔が沸く。

× × ×

バッティング練習。

鬼塚が手本を見せる。

鬼塚、安武の投げたボールをホームラ
ン。

子供たちや観覧者達から歓声があがる。

7 6 〇 同（夕方）

グラウンドには誰もいない。

7 7 〇 同・基地の入口（夕方）

鬼塚と安武、基地から出てくる。

安武「良い気分転換になったろ」

鬼塚「はい。ありがとうございます」

安武「野球って、楽しいよな」

鬼塚「はい。子供たちから教えてもらいました」

安武「俺たちも頑張ろうな。楽しくだ。楽しく野球をやろう」

鬼塚「はい。頑張ります」

安武「軽く、いくか？ いっぱいだけ」

鬼塚「ええ」

安武「そうこなくっちゃ」

鬼塚のスマホが鳴る。

鬼塚「あ、ちよつとすいません」

スマホの液晶画面「長崎病院・水田医師」。

鬼塚、電話に出る。

鬼塚「あ。先生。どうも…え？え。何言ってるんですか。マジで何言ってるんですか」

安武、驚いて鬼塚を見る。

780 葬儀会場・室内

鬼塚、吉江の祭壇の前で茫然と座っている。

葬式を手伝う果歩、生気のなくなった

鬼塚を心配そうに見る。

水田も手伝っている。

水田「吉江さん。やっぱり、言わなかったんだな。圭亮くんに」

果歩、水田を見る。

水田「圭亮くんに迷惑かけたくないって言うてたから」

果歩と水田、失意の鬼塚を見る。

79〇 横須賀球場・駐車場

果歩の車が停止する。

80〇 果歩の車・車内

果歩、助手席の鬼塚を見る。

果歩「圭亮くん……」

鬼塚「俺、野球やめるよ」

果歩「は？え？どうして？」

鬼塚「もういないからさ」

果歩「何が？何で？」

鬼塚「俺のプレーする姿を見て、喜んで欲しい人」

鬼塚、ドアを開けて降りていく。

果歩「何言ってるの。圭亮くん」

果歩、慌ててついていく。

鬼塚「だから、もう代理人もいない」

果歩「え？」

鬼塚「契約、終わりにしてくれ」

果歩「…」

鬼塚、歩いていく。

その背中を茫然と見送る果歩。

8 1 〇 横須賀球場・入口

室内練習場の周辺を囲うフェンスの向こうに、ファンの姿。須田と智花もいる。

そこに鬼塚が通りかかる。

須田「鬼塚さん」

鬼塚「…」

智花「頑張ってください」

鬼塚、二人の方を見ないで室内へ。

8 2 ○ 同・室内練習場

鬼塚と安武、ベンチに座っている。

安武「本気で言ってるのか」

鬼塚「ええ」

安武「ファンはようになるんだ。オマエを応援してる。球団だってオマエに期待して」

鬼塚「…」

安武「…オニ」

鬼塚「…俺、俺、なんでもっと早く気づけなかったんだろう」

鬼塚、泣き出す。

安武「オニ」

鬼塚「一番大事なものの、守れなかった」

安武「オニ…」

鬼塚、その場に突っ伏して嗚咽する。

安武、どうしていいかわからず戸惑う。

8 3 ○ 同・入口

別日。

スマホのスポーツニュースを見ている

須田と智花。

【鬼塚引退か？】のニュース。

智花「あなた」

須田「やめちゃうのかな」

智花「ダメよ。そんなの」

須田「え？」

智花「太陽のこと、話す」

須田「でもさ」

そこへ安武が現れる。

智花「監督」

安武「あ、須田さん」

智花「お願いがあります」

8 4 ○ 同・駐車場

鬼塚、自分で車を運転してくる。

8 5 ○ 同・室内練習場

鬼塚の前に、須田と智花。少し離れた

ところに安武。

鬼塚、生気のない顔でうつむいている。

須田「あの…その…」

智花「私たちには、息子がいました。太陽と
いう名前です」

智花、太陽の写真を鬼塚に見せる。

智花「太陽は、ガンで死んじゃいました。7
歳でした」

鬼塚、驚いて智花と太陽の写真を交互
に見る。

智花「生前、あなたのファンでした。あなた
の打つホームランが大好きでした。他の選
手と何が違うのって聞きました。あの子、
こう言っていました」

須田「高いんだって。空に当たるんじゃない
かってくらい高くあがるって」

智花「あの子、ずっと最後まであなたのこと
応援していました」

須田「それが、生きがいになってた」

須田、泣き出す。

智花も泣き出す。

智花「この子のために、天国に行ったこの子
のためにも、野球、辞めないでください」

8 6 〇 （回想）佐世保基地・目抜き通り

楽しそうに遊ぶ親子連れを横目に観る

鬼塚。

鬼塚と手をつないで歩く吉江。

吉江「心配なか」

鬼塚「…」

吉江「アンタにはばあちゃんがおる」

鬼塚「ばあちゃん」

鬼塚、吉江を見る。

吉江の満面の笑顔で、

吉江「なーんも心配なかよ」

鬼塚も、吉江を見て笑う。

8 7 〇 元の室内練習場

鬼塚の目から涙が落ちる。

須田と智花、太陽の写真を抱きしめる

ようにして抱き合い、泣いている。

安武も泣いている。

88〇 同（夜）

鬼塚、壁当てをしている。

必死に練習している。

89〇 同・事務所（夜）

安武、電話をしている。

安武「私がクビ？ですか」

球団スタッフ「ええ。秋から、今年引退した

田牧さんに三軍監督をやってもらいます。

彼には二軍監督も兼務してもらう」

安武「オニ…鬼塚のことは？」

球団スタッフ「ポジションを代えます。本人

が拒否した場合、一軍の試合には出られな

くなるでしょう」

90〇 同・入口（朝）

安武、荷物を抱えて出ていく。

安武「オニ：頑張れよ」

9 1 〇 同・事務所

田牧健作（32）の前に鬼塚。

田牧「ファームの秋季キャンプに参加しろ」

鬼塚「はい」

田牧「良いよ。キャッチャーで」

鬼塚「わかりました」

田牧「その代わり、普通に練習に参加しても
らうからな」

9 2 〇 同・グラウンド

キャッチボールをする二軍選手たち。

その中に暴投をする選手がいる。

鬼塚である。

9 3 〇 同・スタンド

須田と智花、他のファンに混じって、

心配そうに見つめている。

9 4 ○ 同・グラウンド

内野のボール回し。

鬼塚、ファーストからの送球をキャッチ。サードに投げる也大暴投。

スタンドから嘆息が漏れる。

田牧、その光景を腕組みして見ている。

9 5 ○ 同

打撃練習。

鬼塚、バッティングピッチャーのボールに空振りする。

9 6 ○ 同・スタンド

須田と智花、智花は太陽の写真を抱え、

心配そうに見ている。

鬼塚、また空振り。

ファン「もう、アイツはダメかなあ」

9 7 ○ 同・グラウンド

鬼塚、バットを構える。

9 8 ○ （回想）横須賀球場・室内練習場

智花が見せてくれた太陽の写真。

9 9 ○（回想）佐世保基地・目抜き通り

手をつないで歩く鬼塚と吉江。

吉江の満面の笑顔。

1 0 0 ○元のグラウンド

鬼塚、バッティングピッチャーが投げ

たボールを思いつき振りぬく。

空に当たるくらい高い高い打球。

ホームラン。

× × ×

次々とホームランを打つ鬼塚。

田牧やコーチ達、見惚れてしまう。

1 0 1 ○同（夜）

誰もいないグラウンド。

鬼塚、キャッチャーボックスからサー
ドに防御ネットを設置し、投げている。

ボールが抜けてしまう。

鬼塚「クソっ」

鬼塚、傍にある籠からボールを取る。
投球はワンバウンドする。

鬼塚「クソっ。なんでなんだ」

鬼塚、籠からボールを取る。

サードに投げようとするも止める。

鬼塚、バックスクリーンの方を向き、
思いっきり投げる。

見事な遠投である。

バックスクリーンにボールが辺り、
周囲に大きな音が反響する。

鬼塚、ボールを籠から取り、またバックスクリーンに投げる。

抜ける（ひばり殺し）こともワンバウンド（モグラ殺し）することもなく、
綺麗にまっすぐバックスクリーンに行く。

T・「翌日」

守備練習。

鬼塚、センターにいる。

センターフライを掴み、バックホーム。

キャッチャーのミットにストライク返球。

田牧やコーチたち、惚れ惚れと見ている。

103 ○同・スタンド

須田と智花、これまで見せたことないような笑顔で鬼塚を見ている。

二人の手には太陽の写真。

104 ○横浜球場・グラウンド（夜）

T・「翌年の開幕ゲーム」

次々とスタメンが発表されていく。

スターズのスタメンは3番まで発表されている。

ウグイス嬢「4番、センター鬼塚。背番号2」

105 ○同・スタンド（夜）

須田と智花、鬼塚のユニフォームを着て歓声をあげる。智花の手には太陽の写真。

智花「（写真の太陽を見て）太陽、良かったね」

須田、涙をぬぐう。

智花も泣いている。

106 ○同・会場（夜）

新座、マスコミの取材に答えている。

マスコミA「鬼塚選手の2本のホームランで快勝ですね」

新座「ええ。良い形で開幕戦とれました」
マスコミB「コンバート、大成功ですね」

新座「いやいや、まだまだこれからですよ。
鬼塚自身が、それを証明していかないと」

107 ○同・駐車場（夜）

果歩の車が停まっている。

鬼塚、出てくる。

果歩「サイコー」

鬼塚「まあまあだよ」

果歩「3年後、メジャー行くよ」

鬼塚「気が早いな」

後部座席から、安武が出てくる。

安武「ナイス。ナイスう」

三人、嬉しそうにたわむれる。

鬼塚（N）「俺はキャッチャーを辞めた。淡島さんにまた代理人をやってもらうことになり、安武さんは専属のトレーニングコーチとして契約した。ばあちゃんには…」

108 ○長崎の墓地・全景

鬼塚、歩いている。

109 ○同・鬼塚家の墓

綺麗に掃除されたお墓。

花受けに入れた綺麗な花が風に揺れる。

線香の煙もゆらめく中、鬼塚、手を合
わせる。

鬼塚「ごめん。ばあちゃん。俺、キャッチャー辞めたんや」

鬼塚、墓石を見る。

鬼塚「ばってん、俺のプレーば観たいって言ってくれる人がおって：俺、野球、つづけることにしたとよ」

鬼塚、立ちあがる。

鬼塚「ばあちゃん。天国でみとって。ばあちゃんのとこまで届くようなホームラン、打っけん」

鬼塚、笑顔で空を見上げる。

1 1 0 ○ 横浜球場・グラウンド（夜）

試合の終盤、チャンスの場面。

鬼塚、バッターボックスに向かう。

ウグイス嬢「4番、センター鬼塚」

スタンドから大歓声。

1 1 1 ○ 同・スタンド（夜）

須田と智花の姿。智花の手には太陽の

写真。

1 1 2 ○ 同・スタンドの関係者席（夜）

果歩と安武、並んで見ている。

1 1 3 ○ 同・一塁側ベンチ（夜）

新座、鬼塚を見ている。

1 1 4 ○ 同・全景（夜）

球場の壁にかかった横断幕。

一番目立つところに鬼塚の横断幕。

甲高い打球音。

スタンドは大歓声。

1 1 5 ○ 同・グラウンド（夜）

鬼塚、ホームランを確信し、右手を突き上げる。

（了）